

新聞・雑誌を通して見た朝鮮児童文学の成立過程： 朝鮮児童文学と巖谷小波 その五

金, 成妍
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/8504>

出版情報：九大日文. 8, pp.17-29, 2006-10-01. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

新聞・雑誌を通してみた

朝鮮児童文学の成立過程

——朝鮮児童文学と巖谷小波 その五——

金成妍

はじめに

『京城日報』の記事によると、一九二三年六月に行なわれた巖谷小波の朝鮮巡回お伽講演会の開催目的は、「朝鮮における童話の普及のため」であった。朝鮮における童話の普及のために、「童話普及会」まで組織され、積極的に巖谷小波の口演を実行していた。また、『京城日報』と共に巖谷小波のお伽講演会を主催した『毎日申報』は、一九二三年一月から「子どもの文芸」欄を設け、四ヶ月間一五回にわたって一篇の巖谷小波の童話を紹介した。それが『毎日申報』における最初の童話作家による本格的な童話の掲載となった。

本稿では、『毎日申報』以外の、当時朝鮮に発刊されていた新聞・雑誌に童話に掲載されたのはいつ頃からなのかを追求してみた。なお、朝鮮で行なった巖谷小波の童話執筆活動が、朝鮮における童話の普及にどれ程の影響を及ぼしたのかについても考えてみたい。

用語の説明

歴史的・思想的コンテクストが曖昧になることを回避するために、原則として日本統治期の半島を表す表記に、朝鮮を使用することにした（一八九七年から一九一〇年までは大韓帝国を略して韓国と表記する）。

新聞・雑誌を通してみた朝鮮児童文学の成立過程

『毎日申報』に「童話」が掲載されたのは、一九二二年一月一日付け、「懸賞文芸童話」欄がその始まりであった。「懸賞文芸童話」欄は、同年二月にもう一度設けられる。それからは、一九二三年一月二五日から同紙に企画された「日曜附録人と家庭」の「子どもの文芸」欄を通して毎週、童話が掲載されるようになる。（『九大日文』七号参照）『毎日申報』と並んで当時朝鮮で発刊されていた『京城日報』、『朝鮮日報』、『東亜日報』における、児童文芸欄が掲載される経緯について概観し、まとめてみよう。

まず、一九〇六年九月一日から発刊された『京城日報』から見ていきたい。一九一九年付けの『京城日報』には、「児童文芸物」なるものは見当たらない。しかし、一九二〇年一月一日付けからは、「おときページ」とか「コドモラン」が設けられている。一九二〇年付けの『京城日報』の児童文芸物の掲載内

容は、次のとおりである。

***『京城日報』に掲載された「児童文芸物」(一九二〇年度)**

(掲載日、コーナー／題名／著者名の順)

一九二〇年一月一日水曜日

おとぎページ／世界の王様／静なみ子

朝鮮童話／牛買と和尚さん(上)／桜庭ラルミ

朝鮮童話／動物園の小猿から／寺田斗塩

少年科学／「猿」のはなし

一九二〇年一月七日水曜日

講談／孫悟空

一二月二六日日曜日

コドモラン／オトギバナシ／井上三郎

一九二〇年一月二九日水曜日

コドモラン／題／桜井小学校五年 田村宣子

このように、『京城日報』には、一九二〇年一月一日、「おとぎページ」が新設され、昔話や「朝鮮童話」が掲載されている。それ以来、再び『京城日報』に「オトギバナシ」が登場するのは年末になってからのことである。同年一月二六日から設けられた「コドモラン」に「朝鮮童話」が掲載された。しかし、童話の掲載は不定期であった。

一方、同年一月三日付けには「新年文芸」と題して、作品

を募集する広告記事が出された。この広告によつて募集された文芸ジャンルは、短歌・俳句・漢詩・川柳・情歌・漫画であるが、児童文芸物は含まれていない。『京城日報』において、童話が持続的に掲載されるのは、翌年の一九二一年一月からのことである。一九二一年一月一日には、「元日倶楽部」欄が設けられており、一月八日から同月一八日まで「コドモラン」が続く。その後、一月一九日からは、「婦人と家庭」欄が設けられて、その枠のなかで「コドモラン」を掲載する構成が、ほぼ毎日のように続けられている。その経緯は下記のようなのである。

***『京城日報』に掲載された「児童文芸物」(一九二一年度)**

(掲載日、コーナー／題名／著者名の順)

一九二一年一月一日土曜日

元日倶楽部／童話「鶏林の話」／テルミ生

元日倶楽部／トサカ「褒美」／長野生

元日倶楽部／七つの星／ひとし

元日倶楽部／笑話「忘人」

一九二一年一月八日土曜日

コドモラン／西／桜井小学校五年 田村宣子

一九二一年一月一日火曜日

返事を書いた日

一九二一年一月二日水曜日

オトギバナシ／「鶏の池」／竹実佳永

一九二二年一月三日木曜日

コドモラン／酉の年／東大門小学校五年 永島豊子

一九二二年一月十五日土曜日

コドモラン／当選作二篇

一九二二年一月六日日曜日

コドモラン／下駄と靴

一九二二年一月九日水曜日

婦人と家庭コドモラン／最敬礼／元町小学校五年 斉藤千枝子

一九二二年一月二〇日木曜日

婦人と家庭コドモラン／童話

『京城日報』が童話を掲載し始めたのは、一九二〇年一月一日からのことで、童話欄が定着したのは、一九二一年一月からのことと考えられる。

次に、一九二〇年四月二十九日に「創刊記念号」を発刊した『朝鮮日報』について考えたい。『朝鮮日報』には、一九二二年一月三日付けに「日曜家庭」欄が設置された。「日曜家庭」欄を通して、「少年少女理科」、「童話」、「童謡」などが紹介される。一九二二年付けの「日曜家庭」欄に掲載されたものは、一九二二年一月三日に「遺伝とは何か（少年少女理科）」、同年一月一〇日「家庭で注意すべき女子教育」、同年一月二四日「石馬（童話）」、同年一月三二日「骸骨の歌（童謡）」である。童話を掲載した「日曜家庭」欄は、一九二三年一月二日から、持続的に設けられている。下記のように、サルピヨル(살비열)

という筆名を使った作家の作品が、一月二日から同年六月三日まで継続されている。

*『朝鮮日報』に掲載された「児童文芸物」(一九三三年度)

(掲載日、コーナー／題名／著者名の順)

一九二三年一月二日日曜日

日曜家庭／お金のない国／サルピヨル(살비열)

一九二三年一月二八日日曜日

日曜家庭／青白い牛／サルピヨル(살비열)

一九二三年二月四日日曜日

日曜家庭／青白い牛／サルピヨル(살비열)

一九二三年二月一日日曜日

日曜家庭／青いボート／サルピヨル(살비열)

一九二三年二月一八日日曜日

日曜家庭／青いボート／サルピヨル(살비열)

一九二三年二月二五日日曜日

日曜家庭／人間の由来(少年少女理科)／サルピヨル(살비열)

一九二三年三月二五日日曜日

日曜家庭／恐ろしい盗賊／サルピヨル(살비열)

『朝鮮日報』は、サルピヨル(살비열)という作家の童話を掲載する一方、一九二三年二月八日に、「懸賞童話募集」の広告を出している。広告の内容は次のとおりである。

江原道、伊川幼稚園の教師、金昊炳氏は、幼年教育に従事して以来、この道に多年にわたり多大な貢献をした。この度、さらにその道をおしすすめべく、懸賞童話を募集する。募集期間は本月十五日までであるが、早くも応募者が十余名に達した。今後の童話に一筋の光明が差すものである。

この「懸賞童話」の当選作は、一九二四年一月一日付けに発表され、童話の一等二等三等作と、童話の二等三等作が掲載されている。

『東亜日報』も、『朝鮮日報』と共に「文化政治」による言論規制の緩和によって、一九二〇年創刊された。一九二〇年四月一日にその創刊号を発刊している。一九二三年一月一日の「新年号」から、『東亜日報』における童話の掲載が始まる。「新童話」と記されている、高漢承の「玉姫と金魚」がその最初の童話となった。同年一月三日には、「小波」の名で「童話、天使」が掲載される。「小波」の筆名を使った方定煥によるものである。同年五月二十五日付けには、「二千号記念」として、子ども千人の顔写真が掲載され、当選童話及び童話が発表されている。また、地方伝説と童話「耳遠いアヒル」が掲載される。『東亜日報』にも、『京城日報』や『朝鮮日報』と同様の企画欄が設けられるが、一九二三年六月三日から開始される「日曜号、婦人と家庭」がそれである。『東亜日報』も、「日曜号、婦人と家

庭」欄に「少年少女欄」を設け、童話・童詩・童話などを掲載していく。そして、同年二月三日からは、「月曜欄」に変え、児童文芸物を掲載している。

***「東亜日報」に掲載された「児童文芸物」（一九三三年度）**

（掲載日、コーナー／題名／著者名の順）

一九二三年一月一日

新童話／玉姫と金魚／高漢承

一九二三年一月三日

童話／天使／小波

一九二三年五月二五日

童話／耳遠いアヒル／E.H.生

一九二三年五月二六日

童話／吉男と順女／（賞甲）サンヒ

一九二三年五月二七日

童話／仲いい兄弟／（賞乙）泰榮嚇

一九二三年六月三日

日曜号／童話／成川、金ピョング

一九二三年六月一〇日

日曜号／童話／大邱、徐インダル

一九二三年七月八日

日曜号／童詩

一九二三年七月一五日

日曜号／少年少女欄／童話「木」／一六歳、ヨムゲンス

一九二三年七月二二日

日曜号／地方童謡欄

一九二三年二月五日

日曜号／地方童謡欄

一九二三年二月三日

月曜欄／童話／モグラの一日

以上、当時朝鮮で発刊されていた四つの新聞を調べてみた。

これらの新聞における共通点は、「婦人と家庭」欄というコーナーの新設によつて童話の掲載が定着していくことである。『京城日報』は、一九二一年一月一九日から「婦人と家庭」コーナーの「コドモラン」を通して童話が掲載されていく。『朝鮮日報』は一九二二年一月三日から新設された「日曜家庭」を通して、『東亜日報』は一九二三年六月三日からの「婦人と家庭」欄を通して童話の掲載が始まった。それに比べて、『毎日申報』が巖谷小波の童話とともに児童文芸物の掲載を始めたのは、一九二三年一月二四日からのこと、一足遅れている。ということは、巖谷小波の童話が朝鮮の新聞に掲載されたことをきつかけに、他の新聞における童話掲載が始まったのではなく、朝鮮内部に児童文学の気運が高調しつつ、ある程度の基盤が整い始めたときに、軌を同じくして巖谷小波の童話が掲載されることになり、児童文学の興隆に拍車をかけたと言える。

ひきつづき、朝鮮の新聞に児童文芸物が掲載され始めた草創

期に共通する特徴について述べてみたい。「懸賞募集」を通じた読者寄稿によるものが、専門の作家による作品よりも高い比率を占めている。『朝鮮日報』は、鄭ヨルモ(정열모)とサルピヨル(살피요)という作家の童話を定期的に掲載している。当紙に掲載された童話は、海外童話の再話と伝来童話の改作によつて構成されている。それに対して『東亜日報』は、童話・童謡・童詩などの多様なジャンルを掲載している。また、地方童謡欄を新設して、地方の童謡を収集、普及に努めたことが特色といえる。

『東亜日報』に掲載された初期の童話は、高漢承と小波(소파)によるものである。小波(소파)の「天使」は、アンダーソンの作品を翻訳したものである。しかし、「新童話」と記された高漢承の「玉姫と銀魚」は、創作童話と考えられる。昔話やイソップ物語の再話がほとんどであった当時から見ると、この童話は、貴重な作品だと考えられる。

この童話には、重い病気にかかつて長い間部屋で生活する玉姫(オッキ)という八歳の少女が登場する。彼女は、昼は昔話を思い出しながら空を眺め、夜は、先生からいただいた三羽の銀魚が入っている小さい水族館を眺めながら過ごしていた。ある日、玉姫は、美しい虹の国に行こうと、銀魚が歌を歌いながら自分を誘う夢を見る。夢から覚めてみると、銀魚が死んでいく。それから玉姫の病勢はさらに悪くなり、結局死んでしまう。しかし、おそらく銀魚と一緒に美しい虹の国へと昇天したであろうという作者の言葉で、童話は結ばれている。この童話は、

心理描写にも優れており、昔話や童謡を話のなかに挿入した巧妙な構成である。

高漢承は、小波(ソバ)と共に「天道教少年会」の主要メンバーであり、「セクトン会」の会員でもある。『毎日申報』において、巖谷小波の童話の後を継いで童話に掲載した李定鎬も「天道教少年会」のメンバーであり、『オリニ』の編集長として活動していた人物であった。天道教少年会員による児童文学活動が、各方面からうかがえる。

天道教を背景とする開闢社は、『開闢』をはじめ、様々な雑誌を発刊、出版文化運動を展開していた。一九二三年、創立三周年を迎えた開闢社は、『開闢』第三六号において、「開闢社の三代^{タラシ}雑誌と四大事業」という告知文を出す。その告知文を通して、開闢社は次のように表明している。

今日の我民衆を、道徳的または経済的な威圧の鉄鎖から救出し、人民の感情を昂揚し、生産による収益を増やし、人類を道徳的または経済的に共存する一層高貴な姿に向上させるために必要な階級闘争における最も先進的な部隊たれ。これが、我が開闢社の任務であった。開闢社は、男性と女性の間にあつて、大人と子どもの間にあつて、この任務を果たしてきた。

そこで、『開闢』『婦人』『オリニ』を「三代^{タラシ}雑誌」としてとりあげ、『言論雑誌、開闢』、『婦女雑誌、婦人』、『少年少女誌、

オリニ』と命名、各雑誌の趣旨について述べている。なかでも、『少年少女誌、オリニ』については、「あらゆる運動の基礎運動たる少年運動の先駆となり」と記している。

児童文学を通じた児童運動を志向していた開闢社によつて世に出された『オリニ』に至るまでの、雑誌の中から垣間見える児童文学の経緯をたどつてみよう。

まず、『開闢』から見ると、『開闢』の創刊号(一九二〇年六月二五日)における、児童文芸物なるものは、「笑話」と命名された、イソップ物語程度であった。創刊号以後の『開闢』から見られる児童文芸物の目録は、次のとおりである。

*『開闢』に掲載された「児童文芸物」

(掲載日、通巻／題名／著者名の順)

一九二〇年六月二五日

創刊号／「笑話」

一九二〇年八月二五日

第三号／子どもの歌(灯をとます人)／ジャンムル(彦喜)

一九二二年七月一〇日

第二五号／湖の女王(童話)／方定煥訳

一九二二年九月一日

第二七号／湖の女王(統)／方定煥訳

一九二二年一〇月一日

第二八号／日と月(童話)／朱耀燮

一九二三年一月一日

第二九号／(小説) 毛だらけの商人／小波訳

一九二三年二月一日

第三二号／(童話) 雄の鶏の由来／李英淑

一九二三年三月一日

第三三号／(童話) 金善の物語／金二達

一九二三年五月一日

第三五号／(童話) 金づち／李花天

一九二三年八月一日

第三八号／(童話) 猫と犬／李鐘希

一九二三年十二月一日

第四二号／今月の民謡と童謡

一九二六年七月一日

第六七号／(童話) なぜ？／朴英熙訳

創刊号以来『開闢』に掲載された児童文芸物には、第三号に載っている「子どもの歌」があげられる。「灯をとます人」という副題が記されているこの作品には、「ジャンムル(登喜)」の筆名がつけられている。「ジャンムル(登喜)」とは、「小波」のハンゲル式表記で、「小さい波」という意味である。つまり、方定煥の作品である。作品の最後の部分に、「六一年八月十五日……ゼツコル屋(熨喜烈)にて……訳」という記述がある。「六一年」は、一九二〇年を表す天道教の布徳年代による表記である。このような天道教式表記は、『開闢』が天道教で発行して

いた雑誌であり、方定煥自身も天道教徒であったことによる。

「灯をとます人」という作品は、方定煥が一九二〇年『開闢』の東京特派員として東京に滞在していた頃、外国の作品を訳したものである。原作の題目は「灯をとます人」で、「子どもの歌」とは、方定煥によって付けられたものと考えられる。

昼間、仕事をしていた人々がお弁当を抱えて家に帰り、夕ご飯を食べて、玄関の扉が閉じられる頃になると、梯子を背負いマツチを持って、家々の灯に火をつけるために走り出していく人がいる。

銀行家で名高い父親は、要領よく思いどおりにお金を稼ぐだろう。お兄さんは望むとおり大臣になるだろう。お姉さんは文学家として成功するだろう。ああ、私は将来大きくなったら、何をすればよいか、自分一人で選択できるようになる。そうだ。僕はあの人のように、街から街を歩き回り、家々の明かりに火を灯すのだ。

このような内容の「子どもの歌」には、大きな挿絵が二枚、上段に掲載されてほのぼのとした雰囲気を与えている。右側の上段には、帽子を被った少年が灯の下に立って、脚立を背負ってどこかに歩いている人の後ろ姿を見ている絵が描かれている。左側には、花が咲いている小さな丘に座っている少年の姿を描いている。

この作品には、『開闢』を通して告知した開闢社の基本精神

が、その根底に流れていると考えられる。

『開闢』に童話が掲載されるのは、一九二二年七月一〇日発刊の、第二五号からのことである。第二五号と二七号に二回連載された「童話、湖の女王」には、「仏西、アナロール・フランス作、方定煥訳」と記されている。方定煥の訳による童話は、第二九号においても掲載されている。オスカーワイルド作を訳した、「毛だらけの商人(鬍鬚哥士)」である。この作品には、「小波訳」と記されている。『開闢』には、一九二三年八月一発刊の第三八号まで童話が掲載される。その以降は、一九二六年七月になって、再び童話が掲載されるようになる。

『開闢』と同時期に『婦人』からも童話の掲載を見ることが出来る。『婦人』は、一九二二年六月二〇日に創刊され、通巻一六号を出した後、一九二三年九月一日に廃刊された雑誌である。『婦人』に掲載された童話を次のようにまとめてみた。「ジャンムル」と「夢見草」は、方定煥の筆名である。

* 『婦人』に掲載された「児童文芸物」

(掲載日、ジャンムル名／題名／著者名の順)

- 一九二二年九月一日
七夕物語、秋夕物語／ジャンムル
- 一九二二年九月一日
写真哀話／銀星花／夢見草
- 一九二二年一〇月一日

童謡／赤ん坊／耀燮

一九二二年一〇月一日

昔話／チョンガ(独身男) 在上海／耀燮

一九二二年一月一日

兎と亀の第二回戦

一九二二年一月一日

童話／怠け者

一九二三年二月一日

童話／捨てられた子ども／小波

一九二三年三月一日

童話／善い人の友達

一九二三年四月一日

童話／姫さまと感謝ちゃん

一九二三年五月一日

童謡／青い鳥

一九二三年五月一日

童話／仲良し夫婦／小波

『開闢』は、一九二二年七月から一九二三年八月までの一年間、継続的に童話を掲載した。それと同時期の一九二二年九月から一九二三年五月までは、『婦人』にも童話が掲載される。そこには、方定煥による翻訳物と再話の主となっている。創作問題について方定煥は、『開闢』第三一号(一九二三年一月)における「新たに開拓される〈童話〉に関して」を通して、次のよ

うな考え方を示していた。

我々に童話集が何冊もあり、また童話が雑誌に掲載されているとはいっても、ほとんどが外国童話の訳のみで、我が国の童話の創作が見当たらないのはいささか残念なことである。とはいえ、落胆することはないのである。他の文学のように、童話も一時の輸入期は必然のものであり、初めて鋏を手にした我々は、創作に汲々とするよりは、一方で我が国の古来童話を掘り出し、また一方では、外国童話を輸入して童話の世界を広げ、材料を豊富にするように努力するのが順序だとも思われる。

方定煥は、童話の世界を広げ、材料を豊富にするためには、外国童話の輸入もある程度は必要だという基本的な考えに立脚していた。朝鮮の童話を先導していた彼の考え方が、外国童話の輸入と伝来童話の再話を支持したところからも、この時期には、創作物は稀であったと言える。

『開闢』と『婦人』、この両誌を通して童話の掲載を始めた開闢社は、一九二三年三月、本格的な児童文学の場となる『オリニ』を創刊するに至る。『天道教月報』通巻第一五〇号には、東京で滞在していた方定煥がソウルで『オリニ』発刊を準備していた天道教会の幹部、ゾ・ジョンホ宛に送った手紙が掲載されている。そこで方定煥は、学校教育に対して、「今の学校は、既成社会との一定の約束のもとで、そこに必要な人物を造出し

ている以外に、それ以上の理想も計画ももっていない。」と、学校教育を批判し、「子どもは決して親のものになるために生まれてきたわけでもなければ、ある既成社会の注文どおりになるために生まれてきたわけでもない。」と、子どもの個性を主張している。また『オリニ』における基本趣旨として、次のように述べている。

『オリニ』には、修身・講話のような教訓談や修養談は（特別な場合における、ある特殊なものとは別として）一切入れないようになしければなりません。子ども同士のやりとり、子ども同士の作文・談話または童話・童謡・少年小説、それだけで立派なものです。そこで笑って泣いて遊んで歌って、そうやって育っていくと、それで立派なものなのです。

『オリニ』創刊号に掲載された後書きにおいても、「教訓談とか修養談は、学校で毎日のように聞いているはず、ここでは、ただ面白く読んで遊ぼう、そうやって、知らず知らず、だんだん純粹でやさしい心が育つようにしましょう！こう思って、この本を編みました。」という編集部の言葉が付されている。『オリニ』創刊号には、外国童話の再話、伝来童話を改作した童話劇、そして、世界各国の子どもに関する話と花の伝説が掲載された。『オリニ』に収録されたものを、外来物、伝来物、創作物に区分して、創刊号から第三号までの内容をまとめてみた。

*** 『オリニ (오리니)』** (第一巻第一号〜第一巻第三号)

外来物 (通巻、掲載日、ジャンル名/題名/著者名の順)

第一巻第一号 (一九三三年三月二〇日)

・名作童話/マツチ売りの少女/小波

・世界少年/雪降る北の国アラサの子ども

・花の伝説/三月に咲く花、ヒヤーシント物語/スギ生

・仏蘭西童話/悪戯鬼/夢中人

・イソップ物語/歩きなさい

第一巻第二号 (一九三三年四月一日)

・イタリア物語/黄色い水仙花/雨村

・世界少年/ドイツの子ども

・グリム童話/黄金のガチヨウ/夢中人

第一巻第三号 (一九三三年四月三日)

・花の伝説/四月に咲く花、勿忘草物語/スギ生

・有名な話/宝石なかの姫さま/高漢承

伝来物 (通巻、掲載日、ジャンル名/題名/著者名の順)

第一巻第一号 (一九三三年三月二〇日)

・童話劇/歌の袋/小波

・童謡/バランセ (青い鳥)

第一巻第二号 (一九三三年四月一日)

・童話劇/歌の袋/小波

創作物 (通巻、掲載日、ジャンル名/題名/著者名の順)

第一巻第一号 (一九三三年三月二〇日)

・童謡/春が来ると、ポドルセ

第一巻第二号 (一九三三年四月一日)

・少女小品/お父さん思いース二の悲しみ

第一巻第三号 (一九三三年四月三日)

・童話/眼の悪い漁師/小波

・可哀そうな話/ヨングルの悲しみ/夢見草

『オリニ』第三号までは、筆名を使った方定煥によるものが大多数を占めている。それ以後も、方定煥を中心にしたセクトン会員による作品が主になっているが、巻を重ねるたびに創作物や、読者寄稿によるものの掲載が増えていく。

ここで、一九三三年一月から一九二四年二月までの『オリニ』に掲載された作品を概観しておきたい。この時期は、巖谷小波の童話が『毎日申報』に掲載されていた時期とも重なる。巖谷小波の童話が朝鮮に出されていた同時期に、朝鮮の児童文学を導いていた『オリニ』にはどのようなものが掲載されていたのか。

*** 『オリニ (오리니)』** (第一巻第一号〜第二巻第二号)

外来物 (通巻、掲載日、ジャンル名/題名/著者名の順)

第一巻第一号 (一九三三年一月三日)

・イソップ物語/ロバと鶏とライオン/スギ生

・魔法使い/夢中人

第二卷第一号（一九二四年一月三日）

- ・イソップ物語／都会ネズミと田舎ネズミ／スギ生
- ・小人の名前／夢中人

・発明王／エジソン物語／安先生

・果たしての無い物語／黄先生

・演劇／同じように同じように

第二卷第二号（一九二四年二月一日）

・イソップ物語／金の斧／スギ生

・童話／ラムネー先生の愛

・童話／小人の名前／夢中人

・仏蘭西の童話／小さい福袋／柳ジヨン訳

・発明王／エジソン物語／話す化け物

・汽車を発明したステイブンスン先生の話／安先生

伝来物（通巻、掲載日、ジャンル名／題名／著者名の順）

第一卷第一号（一九二三年二月一日）

・清道流行童謡／金ユンヨン

・馬山流行童謡／金グムドン

第二卷第一号（一九二四年一月三日）

・童話／モグラの婚姻／小波

・送ってもらった童謡五篇

第二卷第二号（一九二四年二月一日）

・童話／お土産でないお土産／小波

創作物（通巻、掲載日、ジャンル名／題名／著者名の順）

第一卷第一号（一九二三年二月一日）

・百日紅物語／高漢承

・虎の背中（絵物語）

・雪は何故降るのか／権寧熹

・写真小説／ヨンホの事情

第二卷第一号（一九二四年一月三日）

・独唱（新童謡）／元日

第二卷第二号（一九二四年二月一日）

・入賞童謡

方定煥は、スギ生という筆名で「イソップ物語」を連載する一方、『オリニ』創刊号から童話劇を掲載していた。創刊号に載せた童話劇には、「学校少年会の誰もができる童話劇」と記している。当時盛んに催されていた少年会のイベントで、簡単に上演できるような童話劇に改作しているのである。

『オリニ』第二卷第一号（一九二四年一月三日）にも、「同じように、同じように（똑같이 똑같이）」という童話劇が掲載される。作家名は記されていない。「同じように、同じように」は、二匹の兎が道端に落ちている餅を同時に見付け、お互いに自分が先に見付けたと喧嘩をしていた。そこへ通りかかった狐が来て、半分に分けてやると言いながら、結局一人で全部食べてしまうという話である。この話は、登場する動物と道端に落ちていたものの素材を入れ替えられているだけで、『毎日申報』の一九二三年一月九日付けに、巖谷小波の「白蛇の出かけた後」の下編と並んで掲載された、山石生による日本語の童話、「二匹

の猫とお猿さん」とほぼ同じ話である。すなわち、「同じように、同じように」が、「二匹の猫とお猿さん」を改作した可能性も考えられるのである。

日本児童文学の先駆者と評価される巖谷小波の童話が、初めて朝鮮の新聞に掲載されたとき、セクトン会などの朝鮮児童文学者がその童話に目を通していなかったとは考え難い。朝鮮初の児童雑誌を試みたばかりの朝鮮児童文学者にとって、巖谷小波の童話は当然興味をもたらしたと考えられる。巖谷小波の童話の後を継いで『毎日申報』に童話掲載したのが、『オリニ』の編集長を務めていた李定鎬だったことも、これを裏付ける。

巖谷小波が「イソップ物語」類の童話を『毎日申報』に掲載していた時期、『オリニ』にも「イソップ物語」が連載されていた。当時の朝鮮児童文学者にとって、児童文学の先進国であった日本の、しかもお伽話の第一人者なる巖谷小波の童話は、目をひくに足りるのみならず、童話の見本になったかもしれない。

加えて『オリニ』には、巖谷小波の童話ではない、それと同時にに出された匿名による日本語童話が翻訳・改作されて掲載された。当時の朝鮮において日本は、童話の先進国であり、見習う対象であった。そうした見習う対象である日本の第一人者とも言える巖谷小波が、朝鮮児童文学に影響を与えたことは十分に推測可能である。朝鮮内部で少年運動を推進していた者たちは、巖谷小波の朝鮮における活動に触発され、それを通して巖谷小波だけでなく日本の他の童話にも目を向けていったと考え

られる。これは、朝鮮児童文学における、日本の童話作家を代表する巖谷小波と朝鮮内部の少年運動の間に潜んでいる「関係性」を物語っているのではないだろうか。

【注記】

1 『朝鮮日報』は、一九二二年一月から一月までが欠けている。また『朝鮮日報』の原文はハングルなので、本稿の日本語訳は筆者による。

2 『朝鮮日報』、一九二三年二月八日付け（筆者訳）。

3 『東亜日報』は、一九二〇年一月から一九二二年一月まで発行停止処分を受けている。また、『東亜日報』の原文はハングルなので、本稿の日本語訳は筆者による。

4 「오늘의 이 民衆을 道德的 또는 經濟的 威圧의 鐵鎖로부터 救出하여 感激의 情調를 높히고 生産의 收益을 늘여서 人類을 道德的 또는 經濟的 公共團體의 一層高級인 形體에 向上케 하기에 必要한 前衛가 되리라 이것은 共開關社의 任務이었다 開關社는 이 任務을 男性과 女性의 가운대서 어른과 어린의 가운대서 履行해왔다」『開關』通卷三六号（開關社、一九二三年六月一日）、筆者訳による。

5 「기 하나 낫 낮동안에 社務를 보던 사람들이 뻔도끼고 집에 돌아와 저녁 먹고 大門 다칠 때가 되면은 사다리 질머지고 석냥을 들고 집집의 장명燈에 불을 켜노코 다들 질 해가는 사람이 잇소 銀行家로 이름난 우리 아버지는 제 조첫 마음대로 돈을 모겠지... 언니는 바라는 大臣이 되고 누나는 文学家로 成功하겠지... 아 하나는 이담에 크게 자라서 이몸이 무엇 을 해야 조홀지 나홀로 選擇할주 잇게 되거든 그 몇타 이몸은 저이와 가디 거리에서 거리로 돌아다니며 집집의 장명燈에 불을 켜리라」『開關』

第三号(開關社、一九二〇年八月二十五日)筆者訳による。

6 「아즉 우리에게 童話集 몇몇이나 또 童話가 雜誌에 掲載된대야 大概外國 童話의 訳뿐이고 우리 童話로 의 創作이 보이지 않는것은 좀 섭섭한일이 나, 그러타고 落心할것은 업는것이다. 다른 文學과 가타 童話도 한때의 輸入期는 必然으로 잇슬것이고 또 처음으로 쟁이(鐵)를 잡은 우리는 아 즉 創作에 汲汲하는이 보다도 一面으로는 우리의 古來 童話를 케어내고 一面으로는 外國 童話를 輸入하야 童話의 世上을 넓혀 가고 材料를 豊富하게 하기에 努力하는것이 順序일것갓기도하다」『開關』第三一号(開關社、一九二三年一月)、二三頁(筆者訳)。

7 『어린이』에는 수신(修身) 강화(講話) 같은 교훈담(敎訓談)이나 수양담(修養談)은 (특별한 경우에 어느 특수한 것이면 모르나) 일

절 넣지 말아야 할것이라 합니다. 저희끼리의 소식, 저희끼리의 작문 담화 또는 동화 동요 소년소설 이뿐으로 훌륭합니다. 거기서 웃고 울고 뛰고 노래하고 그렇게만 키가면 훌륭합니다」『天道教會月報』通卷第一五〇号(開關社、一九二三年三月号)、引用は安京植の『小波方定煥의 兒童教育運動と思想』(學志社、一九九九年四月)からの孫引きで、筆者訳による。

8 「교훈담이나, 수양담은 學校에서 만히듣는고로, 여기서는 그냥 재미 잇게읽고놀자. 그러는동안에 모르는동안에 지질로, 깨끗하고 착한마 음이 자라가게하자! 이러케 생각하고 이책을꾸밈습니다」『オリニ』創刊号(開關社、一九二三年三月二〇日、筆者訳)。

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)